from France

「募ゴハン」でつながる、人と人、そして猫〜パリ12区〜

——今日の買い物に、猫や犬たちのためのものを、なにか一つでよいので加えてみてください。その小さな買い物が、困難な環境にある猫や犬を救います。

スーパーの入り口にある特設スタンドから買い物客にこう呼びかけているのは、パリ12区の動物保護組織「Club de Défense des Animaux du Paris 12ème（以下CDA）」のボランティアの人たちだ。「猫缶1コでも役に立てるのなら」。そう感じた買い物客は、スーパーを出る際に、「今日の小さな買い物」を特設スタンドへ託していく。つまりこれは募金ならぬ「募ゴハン」である。

CDAの活動には、区内の公園や庭に暮らす地域猫や小動物の保護、捨て猫・犬の里親探しなどがあり、その活動資金は賛同者からの寄付金から成る。しかし寄付金だけでは動物たちの食事をまかなえない場合、募ゴハンを行う意義を、CDAのリュデュミラさんはこう説明する。

「お金ではなく『食べ物』であるということは、寄付する方々にとっても用途が理解しやすく簡単に参加できる。また食べ物が生きていくために最も大切であるのは人間も動物も同じという、与える側にも与えられる側にも、切実な共感があります」。そして見落としてはならないのは、猫や犬のための募ゴハンは、最終的には人をも救っているということ。不況はフランスにとっても深刻な問題で、ホームレスや失業者、低所得者が増え続けている。彼らは経済的な事情から、今まで一緒に暮らしてきたペットを飼い続けることが困難な状況に追い込まれるケースが多いが、ペットは彼らを精神的に支える大切なパートナーだ（フランスでは猫や犬と暮らすホームレスも驚くほど多い）。困窮した飼い主さんたちにペットフードを配布するのもCDAの知られた活動であり、寄付する人たちの理由の一つは、「孤立することが多い彼らを何らかの形で援助したい」。フランスには弱者のために組織を作って闘うという精神が強く存在し、募ゴハンはその精神に乗っ取ったものと言える。

CDAが募ゴハンを行うのは年に2〜3回。昨年12月に行われた際に寄付された猫用のものは、カリカリが約178キロ、猫缶が約145キロ、そして猫砂が80キロで、かつてない成果となった。これはCDAの地道な活動が理解されていると同時に、こんな時勢だからこそ、助け合いたいという人々の気持ちの表れなのかもしれない。

（写真・文 堀 晶代）

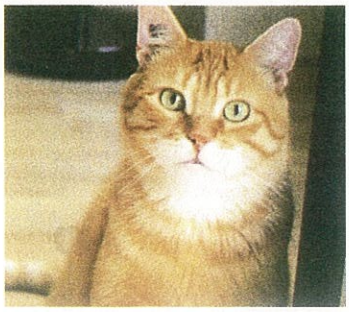
Akiyo Hori
日仏を往復するワイン・ライター。著書に『リアルワインガイド ブルゴーニュ』（集英社インターナショナル）。大阪の自宅には拾ったメインクーンとアメショーが2匹。

Club de Défense des Animaux du Paris 12ème
住所：181 avenue Daumesnil-75012 Paris（本誌39号でも紹介）

特設スタンドで募ゴハンを受け取るボランティア。活動をアピールする場でもある

塵も積もれば山となる。この日集まった食料は、猫・犬用合わせて606キロ!

▲募ゴハンを訴えるボランティア。スーパー側の理解と協力も大切



▶基金として販売されたカレンダーより。掲載されているのはCDAによって保護された子たち